

# すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8 tel & fax043-461-7004

## 地域密着型介護施設と「ひまわりの里」

### “いつまでも自宅で暮らすためのサービスを提供”

#### 地域密着型介護施設

介護保険が改正され、平成18年度より地域密着型介護施設(サービス)という、住み慣れた地域で介護を受けることを目的とした介護サービスが始まった。従来の介護保険事業は、都道府県が指定及び立ち入り調査権を持ち、問題が起きても保険者であり身近な行政でもある市町村は調査情報入手すら困難であった。これらの反省を踏まえ、また多額の施設整備交付金を抑制するため市町村が指定を行い、指導監督する地域密着型の小規模な介護施設を含むサービスが創設されたとも言える。

- ① 小規模特別養護老人ホーム
- ② 小規模特定施設(有料老人ホーム)
- ③ グループホーム
- ④ 小規模多機能型居宅介護
- ⑤ 認知症対応型通所介護
- ⑥ 夜間対応型訪問介護

などがある。佐倉市では市内を5つの生活圏域に分け、各圏域ごとに①から⑤を1ヶ所ずつ計画している。⑥だけは全市で1ヶ所。この中でユニークなのは小規模多機能型居宅介護事業(以後多機能型とする)で、事業所専属のケアマネが月ごとにケアプランを作成するが、利用者の様態や希望にあわせフレキシブルに対応するもので、デイサービス・ショート・訪問介護を組み合わせ入浴・排泄・食事等の介護を行い在宅での生活を支えるのだ。利用料は1割負担で要介護度により月額11,430円～28,120円。他に食事代、宿泊費(一泊2000円)の実費負担がある。通常は登録が25人、デイサービス15人、泊り5人(最大9人)という基準枠があり、デイサービスは月10回位の利用を想定している。これだけだと費用が高いと思われるが、24時間緊急時対応の訪問介護がついているので、「安心も買っている」と考えれば決して高くないと思う。サービスにある訪問介護は定期的に行うものではなく、体調が悪くデイサービスに行けない時その代替として自宅で介護を受けたり、夜間を含む緊急時にヘルパーに駆けつけてもらったりするサービスを指している。他の介護サービスとの併用は出来ない。

#### オープンまもない「ひまわりの里」を見学して

国の定めた設備・人員・運営基準を見ると事業者にとり厳しいもので、採算を考えると誰も申請しないのではと危ぶんでいた。しかし、今年6月に臼井・千代田圏域に「ひまわ

りの里」(社会福祉法人「ひまわりの里」)という多機能型が出来たと聞き、早速友人と見学した。病床付の外科医院を改装した建物は新築と見まがうほどきれいで明るく、床暖房等設備も整っていた。施設長は国立病院の看護師長の経歴を持ち、50床の痴呆病棟担当の経験をもつケアマネも兼ねた方で、大規模施設では出来なかつたきめ細やかなケアをしたといひ話された。職員も同じ志を持つ人が多く、立ち上げたばかりで登録人数も12名と少なく、なごやかな雰囲気は伝わってきた。送迎及び緊急時の駆けつけ等を考えると中学校区に1ヶ所が望ましいと施設長は言っていたが、現状は生活圏域どころか全市に1ヶ所しかなく、登録者も井野・上志津・うすいと広範囲だ。採算を考えると登録を25人まで増やす必要があり、広範囲にちらばる登録者の緊急時に適切に対応できるのか不安である。介護施設の待機者があふれている現状では、多機能型が在宅介護を支える最後の頼みの綱だと感じた。しかし、今のような報酬や整備交付金では事業として成立させるのは難しい。地域密着型介護施設(サービス)は生活圏域ごとにあつてこそ、その機能を果たせるのだが。

携わる者が希望を持って働ける介護保険事業になることが介護保険存続の要件だと思ふが、実際は年々反対の方向に向かっている(K)

\*\*\* \*\*

## 共同募金・日赤への寄付、自治会費上乗せ無効判決に寄せて

### —自治会・自治会費ってなんだろう—

#### 高裁の無効判決とは—希望が丘自治会の場合

新聞報道によれば、滋賀県甲賀市希望が丘自治会の会員住民5人が、赤い羽根共同募金や寄付金を自治会費に含めて強制徴収するのは違憲などとして、募金や寄付金分を自治会費に上乗せした決議の無効などを求めていた。大阪高裁は8月24日、「決議は憲法の思想、信条の自由を侵害し、民法の公序良俗に違反する」と一審判決を破棄し、決議を無効とする住民勝訴の逆転判決を言い渡した。まっとうな判決が出たと安心したのだが、自治会側は上告したという。

判決は「募金は任意で行われるべきで、強制されるべきではない」と判断し、「集金の負担解消を理由に会費化すること自体、多様な価値観の会員がいることを無視し、募金の趣旨にも反する」とした。憲法は私人間の問題に適用されないとしながらも、実質的に違憲と指摘した。問題の自治会は赤い羽根共同募金や小中学校の後援会への寄付金などを住民から任意で集めていたが、昨年3月の総会で年会費を6000円から8000円に値上げし、増額分を募金や寄付金に充てる決議をしていたのだ。

#### 数年前まで私たちの自治会でも

この判決で、数年前までの宮ノ台3・4・5丁目自治会ことを思い出した。自治会は、日本赤十字社の社資募集や社会福祉協議会の会員募集に応じて、班長さんは、自治会費とともにそれぞれ500円の領収書をもって集金し、秋になると赤い羽根と交換で共同募金も集めていた。会費上乗せでこそなかつたが、半強制的なニュアンスで、集める班長さんには重荷であり、会員は断りにくかつた。最近では、回覧方式の手渡し励行で定着しているようで、ひとまずほっとしている。しかし、本来、募金や寄付は自由なはずで、自治会が募金システムに組み込まれること自体が福祉や善意のボランティア精神には似つかわしくないのではないかと、思うようになった。さらに、集めら

れたお金がどのように支出されているかが大いに問題にされるべきなのである。運営費一人件費や事務費、団体自体存続のための支出が大半を占めることが多いのだ。

### ディベロッパーが自治会の強制加入を進めているって、ほんとう？

私たちの町内の戸建てから駅前のマンションに住み替え、家族の通勤や通学がラクになったし、スーパーも病院も近くなったと喜んでいた友人が、自治会の組織率が低いからと管理組合費に自治会費が組み入れられることになるともらしていた。「自治会費は管理費から出されていますので、ユーカリ祭にもぜひご参加ください」みたいな掲示も貼ってあったという。そんな矢先、この街の大型マンションの売主でもあるディベロッパーの山万は「ユーカリが丘子育てのまちづくり」と銘打った広告（朝日新聞 3月14日）や「安心で売るニュータウン」といった記事（同 8月17日）の中で、「住民の方には自治会に全員参加をお願いしています」「住宅購入に際して、自治会加入は義務になっています」と誇らしげに語っているのを目にした。自治会って、ディベロッパーが加入を勧めたり、強制したりするものではないはず。そういえば、各自治会の連合体である地区自治会協議会では、役員が山万のイベントに招待されたり、開発計画が発表されたりしていたが、いいところ取りの感じで、実際あとになって各所でトラブルが発生するケースが多かった。現在の自治会が「市民協働」の掛け声のもと、行政の下請け業務に翻弄されるなか、ディベロッパーが関与する自治会って、かなり「あぶない」のではないか。（M）

### —編集後記—

◇編集子が個人のブログを開いて2年近く経つ。

身近な地域の問題と趣味や日常茶飯のことを細々と綴ってきた。閑古鳥が鳴く時期もあったが、この1か月、驚くべき反響があった。本号でも取り上げた、寄付の自治会費上乘せ徴収の問題を登載したところ、アクセス件数

### 工事現場の十六夜(宮ノ台 2007年9月)

が一挙に数倍となり、1日100件を越えることもあった。1日のアクセスがすべて、この関係キーワードでの検索であったこともある。分かる範囲でも福岡から札幌まで、その検索者は全国に散在している。それほど関心の高い問題でありながら、「隣りご近所」がかかわるだけに顕在化しにくかったのか。ことしも赤い羽根の季節がやってきた。「政治とカネ」の問題は案外身近なところにもあるのかもしれない。

◇私が本誌の配布を担当する町内は、ポストまで階段というお宅もかなり多いです。新しく手すりをつけたお宅もあり、車庫には、もみじマークや車椅子のステッカーが貼られている車をよく見かけるようになりました。この街の高齢化が進んできているのがよくわかります。今号の「ひまわりの里」探訪記は、思わず引き込まれました。年金・医療・介護の制度は待ったなしです。この臨時国会での論議はしっかりと見守らなければなりません。

◇本誌は、宮ノ台全域の全戸配布に加えて、近隣の郵便局、公民館などに置いていただいています。ご懇意のお店など、他に置いていただけたところがありましたら、ぜひ、ご紹介くださるようお願いいたします。

# 菅沼正子の映画招待席 24

## エディット・ピアフ 愛の賛歌

—歌と愛に生きたピアフの壮絶な生きざま—

エディット・ピアフという歌手の名前を知らなかったとしても、〈バラ色の人生〉や〈愛の賛歌〉は、だれもが知っているだろう。日本では越路吹雪が歌ってあまりにも有名だが、時代を超え、ジャンルを超え、歌いつがれているこの名曲を 50 年代に作詞・創唱（〈バラ色の人生〉は正確には創唱ではないが）したのがエディット・ピアフである。47 歳で生涯を閉じた、短くも情熱的なピアフの人生を描いたこの映画は、魂と歌と生と死と——それがピアフの生きた歴史であるだけに、感動はやまない。

ピアフ（マリオン・コティヤール）が、最後のアメリカ公演（1959 年）となったステージで倒れるところから始まる。

死の 4 年前のことだが、もう体はかなり病んでいて、医師がつきっきりで点滴をほどこしてのステージを続けている日々。この日も、いつもと変わらぬボリュームで、しみじみと、深い悲しみを歌い上げ、観客の拍手喝采とスポットライトのなかで倒れこみ、救急車で運ばれる。もっとも愛するステージで、もっとも愛する歌を歌いながら……、まるで殉教者のような印象。

そんな晩年のピアフから、映像は一転して、薄幸な幼少時代、少女時代へとプレイバックしていく。

娼館で育ち、路上で歌い、ようやく歌手として認められ世界的な大歌手に。その時制を行ったり来たりしながら、多彩なエピソードを重ねていく。結婚は 2 度だけだが、ほかに何人ともなく男を代え、モルヒネとアルコールの依存症で体はむしばまれ、交通事故も複数回、もっとも愛した恋人を飛行機事故で失い、と、普通の人ならその 1 つもないかもしれないような、悲しみと苦痛に満ちている。それでもピアフは歌い続ける。「歌うことが私の人生、歌えなくなったら生きていない」と。

47 歳といえばまだ若いのに、晩年はもう 80 代の老婆の姿。あまりにも急いで人生を燃焼させてしまったのか。すべてが実話にもとづいていて、ピアフの初のアメリカ公演（1947 年）でマレーネ・デートリッヒに「あなたの声はパリの魂」と賞賛されて以来ジャン・コクトー同様、生涯親交を続けたが、この実話のなかでイヴ・モンタンがすっぽり抜けているのはなぜか？モンタンを見いだしたピアフは数年愛人関係にあり、シャンソン歌手としてのモンタンの基盤を築いたのだ。

印象的なのはマリブ海岸でのインタビュー。女性へのアドバイスはと聞かれ「愛しなさい」の一言。「若い娘には？」も「こどもには？」も「愛しなさい」とだけ。人生はすべて愛から始まっているということが実感として伝わってくる。自分に正直に生きたピアフだからこそ真実みがある。

「プロヴァンスの贈り物」でラッセル・クロウの相手役をやったマリオン・コティヤールのなりきり演技は見もの。来年のアカデミー賞かもしれないと、私はいまからワクワクしている。（9 月 29 日より公開）